

〈うつし〉(現・映・写・移・遷)と 〈うつくし〉の形而上学にむけて

国学的言霊論と欧州古代触覚感性論との哲学的遭遇

稲賀繁美 *ひらがな*

山下善明 著

美とうつくし

〈あるがまま〉についての思索
1・20刊 四六判206頁 本体2500円
晃洋書房



先日物故したウンベルト・エーコには『美の歴史』が知られる。この記号学者は世界の言語における「美」意識の比較にも関心を抱いていた。インドでの会合「Ekat」という概念が欧米語へいかに翻訳されてきたかを巡って討論を交わしたことがある。だがその結果は潰滅的だった。およそ欧米語での理解はいくつかの核となる観念に収斂することとなり、支離滅裂な発散ぶりを見せたからだ。そこから得られた教訓がひとつある。欧米語を基準としてその根柢に非欧米語の観念を載せても、そうした解釈の試みは必ずしも功を奏しない。

東アジア文化圏でも、同様の試みに慎重な配慮が要求される。そもそも漢語の「美」は「へうつくし」と同義なのか？ それらは欧米語の等価物とされる語彙と、本当に等価なのか。山下善明『美とうつくし』はこの厄介な難問に、ひとつの哲学的な「触知」を与える。

『竹取物語』には「三寸ばかりなるひと、うつつくしうてわたり」とある。「映る」姿には「蔽」「イマ」「しき」あるいは「くすし」「奇し」との類縁も想定できる。これは江戸時代の高田残夢が編んだ『国語本義』の説明「うつくし」「映高し」に通じる。従来この解釈は「言霊論による付会」として退けられてきた。だが『源氏物語』『若菜』巻の「うつくし」へ「あまやかに」などの用例は、「うつくし」狂歌「とあまはやか」の「へさ・映ゆ」との類縁を示唆している。「うつし」が上代では「現し」であり、そこから著者は「あるがまま」の「現れ」に「うつくし」の本体を見ようとする。これは西洋古典哲学に通じるのではないか。

学に通じるのではないか。不思議なことにアリストテレスの『靈魂論』(De anima)だから、著者は『靈魂論』の訳を好む。は「触覚の基底性を説き及ぶ(巻6章)、『形而上学』は「触」>「言」を「真」>「隠れなきこと」と「体」把握する(巻10章)。Wahheit = Unverborgenheitだが、これと「うつくし」>「く」との並行関係は、ただの偶然に過ぎないのだろうか。この「アーレー」を媒介に、手塚富雄との対話のなかで、アリストテレスと「この解釈を提案したハイテカーはまた『言葉についての対話より』を残す。そこで対話者たる手塚富雄は、De rühren(触れ)の「betasten」>「触れる」とは日本語では極めて異質だと語っている。手塚側の記録には見えないため、著者はここにハイテカーの解釈を見る。意志的な「触れる」と無意識的な「触れる」の違いについては、本書で言及はないが、坂部恵にも卓抜な議論が知られる。そこでも「触れる」が主客分離以前、受動・能動の区別を無化して人を神秘体験へと誘う根源性が示唆されていた。ハイテカーは「hapin」>「触」を感性つまり「aisthesis」と等号で結ぶが、この後者の「感性学」でカントの『判断力批判』の「無関与」>「interesses」が投影されていると著者は見ている。私見ではそれは「明暗」に云う「ひとでなし」の境地に至るはずである。となれば「非人情」の「ひとでなし」の境地にあって人が「触れる」世界とは、カント以来の美学体系を基底まで掘り下げた地点を示し、そこで「うつくし」の言霊説は、九鬼周造とも交友のあったハイテカーを媒介に、手塚富雄との対話のなかで、アリストテレスの「靈魂論」に再度「触れる」となる。著者の表現を借りるならば、ここで「西洋形而上学」がその根源において「あるがまま」という「ヨーロッパの存在論が、ヨーロッパの存在論の忘れられた根底と呼び合う」という「驚くべき」事態に我われは遭遇していることになる。

評者は最近「接触造形論」を上梓した。そこで「うつくし」と「うつり」を鍵言葉に接触による造形をいささか分析した。その背後には「うつくし」の領野が控えていたことになる。あるいはそれは、著者も語るとおり「無理筋を辿った論究」であった恐れを免れまい。だがここには、西洋形而上学との真摯な邂逅・対決が導く、ひとつの論理の筋道が透徹されている。

説明不足を覚悟で付言するならば、九鬼周造における言霊論「韻律論」には伊藤邦武が『九鬼周造と輪廻のメタフィジクス』で先鞭をつけている。また「うつした靈魂論」に傾斜した議論が西洋近代の學術(伝統で忌避されてきた由來の根源を解明したのが、今村仁司の遺著『社会性の哲学』だ)たる筈である。今やこれらの研究を統合する契機が訪れようとしているようだ。

(国際日本文化研究センター・総合研究大学院大学)

betasten

betasten